資料７－１

文化審議会第 11 期文化政策部会（第三回）　平成 25 年 9 月 24 日

仲道　郁代

１　音楽の二元性とその限界

鑑賞　　理解すべきものとしての教育

実践　　習得すべきものとしての教育

２　新しい可能性

音楽に近づくためのプロセスから得ることとは

高度な思考　分析に触れる学習

３　ワークショップの定義

・協働性

・即興性

・身体性

・自己原因性感覚

これら 4 要素を内包するものをワークショップとする

４　音楽ワークショップがもたらすもの

・知覚　認識能力の発達

・言語習得能力の増進

・知能発達　空間認識能力の向上

・想像力の育成

・一般学習到達度の向上

・自尊心、自信、自制心、対人コミュニケーション能力、ソーシャルスキルの向上

・信頼、敬意を身につけることによる、交渉、譲歩力の向上

・社会との一体感、自立、前向きな姿勢をはぐくむ

英国 Institute of Education 及び 米国 Kennedy center　による研究

５　新しい試み

鑑賞とワークの融合

■鑑賞型

知識としての音楽ではない、体感型の音楽を目指す

答えのない問いがあるということを知るために

芸術とはクエスチョンであるということ

【鑑賞型の実例】

音の動きを視覚化する

音を五感に変換する

音楽を視覚化する

音楽を言葉に置き換える
言葉のイメージを音に置き換える
音を身体化する
音楽の背景、（歴史、地理、）を知る　　など

■ワーク型
【ワーク型の実例】
1.英国 グラスゴーにおける免疫学と音楽ワークショップのコラボレーション
参加者：5 歳～18 歳　約 25 名
①カードゲーム
（知らない者同士が知り合うためのゲーム）
②ベートーヴェン運命交響曲を聴き、モチーフを探す
（ベートーヴェンにおけるモチーフの定義を知る）
③モチーフを粘土で作成
（遺伝子配列のイメージへの序奏）
④ベートーヴェンにおけるモチーフの変異の説明
⑤運命の 4 音のモチーフを自分なりに変換する
⑥免疫学者による遺伝子変異、免疫システムについての説明
⑦それぞれの 4 音を皆で組み立てて音楽にする
（ベートーヴェンの作曲プロセスをなぞりながら）
⑧作品発表
（遺伝子や、病原菌の映像とともに）

2.東京音楽大学音楽教育研究マスタークラス講義
参加者：大学 1～4 年生　約 130 名
①谷川俊太郎の詩「ぼく」の朗読。次に異なる 3 曲を聴きながら、朗読を聞く
（音楽によって言葉の意味合いが変わるということ）
②全員で一つの円になり、ボディパーカッション＆お茶ケチャ
（お茶ケチャというリズム遊びにより、3 部形式・ロンド形式・組曲の音楽の組み立てについて知るということ）
③各自、紙に「○、△、□」いずれかを書く。7 グループに分かれ、その紙を持ち寄り、グループごとに自由に作品を作る。
（音楽とは何でできているのか実体験し、皆で工夫するということ）
④発表
（多様なアイデアを知り、認め合うということ）

3.宮城県七ヶ浜町
参加者：小学校 6 年生　約 30 名前後ずつ
①ボディパーカッション
（コミュニケーションを音でとるということ）

②グループに分かれて、「20 歳になった時の私たち」と「20 歳になった時の七ヶ浜」についてのキーワードを話し合って決める。グループごとにそのキーワードに対してイメージした言葉を紙に書き、それをもとに 8 拍のリズムとメロディーを付ける
（未来に思いをはせる、それを話し合う、それらを皆で工夫して音に表す）
③各グループの言葉を書いた紙をソナタ形式に則って並べて、全員でピアノの伴奏と共に演奏・録音

4.広島県生口島　閉校する小学校
参加者：小学校 1～6 年生　約 45 名
①ボディパーカッション
（言葉を使わない、音による意思疎通があるということ）
②それは知らないゲーム　渡された楽器をそれぞれが好きに鳴らしていくゲーム
（無調の音楽というものがあるということを知り表現の自由を知る）
③全員で「朝の情景」、「下校時の情景」について話しあい、どんな音楽にするか考える
（日常の音を探すことから、生活を見直す）
④二つのグループに分かれ、「朝の情景」、「下校時の情景」の音楽を組み立て、音楽表現の工夫をする
⑤校歌の間に朝の音楽、地元の太鼓音楽、下校時の音楽と全体をつなげて練習して、発表会
（閉校を控え、思い出を皆で協働してつくりあげる）
～曲の流れ～
校歌 1 番（全員）→朝の情景音楽→和太鼓（3.4 年生のみ）→下校時の情景→校歌 2.3 番（全員）

5.福島県　南相馬市
参加者：小学校 5 年生　約 25 名ずつ
①ボディパーカッション
②各グループで元気が出るリズムを 8 拍つくる
（皆でリズムの工夫をする）
③各グループのリズムをつなげて曲にする
（音楽の工夫）
④「With you smile」という、人と人とのつながりを歌った曲の中間に皆で作ったリズム部分を挿入して演奏
（力を合わせること、個を尊重することの大切さを意識する）

６ 音楽ワークショップの社会における可能性

教育
芸術理解
福祉
コミュニティ形成

個の認識やつながりをもたらすものが、音楽という人間の根源的な欲求であり、人間を人間としている精神活動であるということ

７ 必要とされること

プログラムスキル

・何のためにどのようなワークを設定するのか（専門的知識の必要性）

・参加者の年齢、環境に適しているか

・その場に適しているか（指導要領とのすり合わせなど含めて）

スケジュールの構築などの事務能力

実施のためのリーダーシップ

・関わる人たちとの関係構築能力

進行と成果のレポート、評価作業

８ 学校に入るための問題点

学習指導要領とのすりあわせ

45 分という時間との闘い

評価の概念の相違

外部侵入者という立ち位置

知識を得ることへのかたより

～説明責任が問われている

９ ツールとしての音楽

音楽の社会化とは

資料７－２

七ヶ浜アウトリーチ　報告書

近畿大学豊岡短期大学　鈴木香代子

《事業のねらい》

- 演奏家によるアウトリーチにワークショップを内包させ、鑑賞と表現活動の有機的な関連を図る。
- ワークショップでは子どもたちの将来や環境を題材とした創作活動を行い、表現力やコミュニケーション能力向上を図ると共に、地震・津波によって被災した子どもたちの心のケアを目的とする。

《実施概要》

2012 年 11 月 7 日実施　亦楽小学校
10:05～10:50「鑑賞型アクティビティ」（6 年生全員）
10:55～11:40「ワークショップ」（6 年 1 組 26 名）
11:45～12:30「ワークショップ」（6 年 2 組 26 名）
アーティスト：仲道郁代　ファシリテーター9 名　職場体験の地元中学生 3 名

2012 年 11 月 8 日実施　松ケ浜小学校
9:40～10:25「鑑賞型アクティビティ」（6 年生全員）
10:35～11:20「ワークショップ」（6 年 1 組 33 名）
11:30～12:15「ワークショップ」（6 年 2 組 32 名）
アーティスト：仲道郁代　ファシリテーター9 名　職場体験の地元中学生 3 名

2012 年 11 月 9 日実施　汐見小学校
9:40～10:25「鑑賞型アクティビティ」（6 年生全員）
10:45～11:30「ワークショップ」（6 年 1 組 34 名）
11:40～12:25「ワークショップ」（6 年 2 組 33 名）
13:45～15:20「ワークショップ」（6 年 3 組 34 名）
アーティスト：仲道郁代　ファシリテーター7 名　職場体験の地元中学生 3 名

《内容》

◎鑑賞型アクティビティ

① 導入（隣に座った児童やファシリテーターと無言のまま目を合わせながら握手をする。言葉を介さずに、相手の情報を感じ取る。）

② 道具を使用した提示。（ボールやフープ、シャボン玉を使って様々なアクションをおこし、それにピアノの音を付ける。躍動感やなめらかな感じ、浮遊するような感じなどを音で表す。）

③ ②の活動を受けて、演奏（キラキラ星変奏曲／モーツァルト）の中の表現やイメージをより深く感じ取る。

④ 空間に響く音の減衰や余韻を感じ取る活動。

⑤ 見えないボールのキャッチボール。（人の思いや気持ちを感じ取ったり、受け止めたり、こちらから働きかけたり、言葉を介しないコミュニケーション体験。）

⑥ 演奏（エチュード／ショパン）から感じたことを発表する。

⑦ 演奏（愛の挨拶／エルガー、別れの曲／ショパン）と絵の関連性を考える。

⑧ 演奏（子犬のワルツ／ショパン）を聴き、音楽の具体的な表現を理解する。（数名の児童に具体的な子犬のイメージを考えさせ、そのイメージに合った表現の演奏を聴く。）

⑨ 絵と演奏（光のこどもたち／田中カレン）の関連を図りながら、音楽的な感受を深める。

⑩ 演奏（月光ソナタ／ベートーヴェン）と、楽曲の要素や構成と歴史的背景の学習。（音楽には、作曲者の思いや意図が込められているということや、ソナタ形式についての学習をした上で、ワークショップ活動につなげる。）

◎ワークショップ

ボディパーカッション（拍の移動や呼吸合わせ、強弱の表現など）を行った後、グループに分かれて創作活動を行った。創作活動では、「20 歳になった時の私たち」と「20 歳になった時の七ヶ浜」についてのキーワードを話し合って決め、グループごとにそのキーワードに対してイメージした言葉を紙に書き、それをもとに 8 拍のリズムとメロディーを付けた。音楽が出来たら、普段授業では使用しないような楽器（鼓や太鼓、ジャンベ、鉄琴、ミュージックベルなど）を使って練習。各グループにはそれぞれファシリテーターが 1～2 名加わり、児童の意見を引き出し、楽器の工夫を促しながら練習を行った。最後に、各グループの言葉を書いた紙をソナタ形式に則って並べて、全員でピアノの伴奏と共に演奏・録音をした。

《事業の成果》

今回の取り組みは、ピアニスト仲道郁代が社会貢献として取り組んでいるものの一つである。音楽の楽しさを伝えることだけではなく、音楽教育を視野に入れ、一歩踏み込んだ内容の取り組みである。

今回訪れたのは、去年の大震災で津波の大きな被害を受けた宮城県七ヶ浜の小学校である。大切な家族や家を無くした子どもや、豊かな自然が崩壊した地区もあり、時間が経過した今も子どもの心のケアは必要とされている。もともとレジデンス・アーティストとして七ヶ浜と交流のあった仲道が、この取り組みを実施することで、子どもたちが音楽を好きになるだけではなく、関心や意欲を高め、子どもたちの豊かな未来を、と願って行われたものである。

鑑賞型アクティビティでは演奏だけではなく、自らパフォーマンスを行い子どもたちと対話を重ね、発言を多く引き出した。子どもたちは感じ取ったことを発表したり、他の意見を聞いたりすることで、様々な捉え方を知り、音楽的な思考や言語能力を高める活動となった。

なかでも絵を使用した活動は、視覚と聴覚の両方から分析的に把握できるように方向づけしたものである。これは理解を促し、より深く音楽を味わおうとする意欲を高めるものである。しかし今回は、子どもたちからは、「閉じ込められている感じ」「寂しい感じ」などの意見も出て、心の中にある傷を感じさせるような一面を覗かせていた。そして、曲の歴史的背景についての学びは、音楽文化の価値や芸術性についての理解を深める活動であった。子どもたちは、目の前の素晴らしい演奏に心を奪われるように集中して聴き、感受性を高めていった。

ワークショップでは、グループごとにファシリテーターの大人と職場体験の中学生が加わり、一緒に自分たちの気持ちや思いを音楽で表すという活動に挑戦した。子どもたちは、未来の自分や仲間たち、未来の七ヶ浜の環境を心に描きながら、創作と表現活動に取り組んだ。最後にグループごとの演奏をつなぎ合わせてソナタ形式に組み立て、仲道が伴奏をつけることで、単に音を並べただけのものとは違い、ひとつの楽曲として達成感の高いものが出来上がった。みんなで拍子を感じながら演奏し、楽しさや一体感が子どもたちの心を満たした活動となった。

今回の取り組みは、小学校音楽科のねらいである「表現と鑑賞の関連を図る」と言う点において、鑑賞型アクティビティでの聴取経験が土台となって、ワークショップでの表現活動に生かされた活動であったと言う事ができる。また、新しい学力観が求める思考力や判断力、表現力やコミュニケーション能力の育成を音楽表現の側面から具現化すると言う点において、今後大いに期待できる活動であった。